伝統建築・伝統工芸の技術と文化の継承に関する匠領域の教育・研究

著者名(日)	新妻 淳子，藤井 尚子，荒川 朋子，平野 英史，小田 伊織
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	23
ページ	111-126
発行年	2023-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00001788/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

伝統建築・伝統工芸の技術と文化の継承に関する匠領域の教育・研究

Education and research in the field of TAKUMI related to the inheritance of techniques and culture of traditional architecture and crafts

新妻　淳子
デザイン学部　デザイン学科
NIITSUMA Junko
Department of Design, Faculty of Design

藤井　尚子
デザイン学部　デザイン学科
FUJII Naoko
Department of Design, Faculty of Design

荒川　朋子
デザイン学部　デザイン学科
ARAKAWA Tomoko
Department of Design, Faculty of Design

平野　英史
デザイン学部　デザイン学科
HIRANO Eiji
Department of Design, Faculty of Design

小田　伊織
デザイン学部　デザイン学科
ODA Iori
Department of Design, Faculty of Design

伝統的な建築・工芸についての知識と基本技能を修得し、現代社会と呼応しうる新たなデザインを生み出す人材を養成することを目的に、2019年デザイン学科に匠領域が増設された。2017年から継続している伝統建築を通した教育・研究・地域連携の成果、「工芸」「匠」の位置づけ、匠ものデザインプロジェクト、遠州地域との関わりと「織」教育プログラム、旧田代家住宅を活用した学生作品展について報告し、伝統建築・工芸の技術と文化の継承という大きな課題の中での、デザイン教育における「匠」について検証するものである。

In 2019, the Department of Design was expanded to include the field of TAKUMI, with the aim of acquiring knowledge and basic skills in traditional architecture and crafts, cultivating human resources capable of creating new designs that can respond to modern society. This study reports on the results of education, research, and regional collaboration through traditional architecture that have been continuing since 2017, the positions of "KOUGEI" and "TAKUMI", the craftsmanship design project of “TAKUMIMONO”, the relationship with the Enshu region and the "weaving" education program, as well as the exhibition of student works using former Tashiro residence. It also examines "TAKUMI" in design education amid the major issue of inheriting traditional architecture, craft techniques, and culture.

1．はじめに－デザイン教育における「匠」の位置づけ

新妻　淳子

2019年にデザイン学科５領域（デザインフィロソフィー、プロダクト、ビジュアル・サウンド、建築・環境、インタラクション）に匠領域が増設された。伝統的な建築・工芸についての知識と基本技能を修得し、現代社会と呼応しうる新たなデザインを生み出す人材を養成することを目的に設けられたものである。

デザイン学科匠領域開設のための調査・研究は、2017年度から教員特別研究として始まり、2019年度開設から完成の2022年度まで次のように研究を継続している。

【2017年度】（研究代表者：伊豆裕一教授（当時））
「地域伝統建築・工芸とデザイン活動に関する研究」匠領域の教育内容の検討と準備。
【2018年度】（研究代表者：筆者）
「デザイン教育における伝統建築・伝統工芸の位置づけに関する研究」匠（技能者）と協働する現代・未来のデザイン教育プログラムの考案。
【2019年度】（研究代表者：筆者）
「デザイン教育における伝統建築・伝統工芸の技術継承と協働に関する研究」デザイン教育において匠（技能者）の持つ伝統建築・伝統工芸の技（技能・技術）をどのように継承し、匠と協働すべきかについて実践的な研究を推進。
【2020～2022年度】（研究代表者：筆者）
「伝統建築・伝統工芸の技術と文化の継承に関する研究」匠が持つ伝統建築・伝統工芸の技（技能・技術）とその背景にある文化・芸術を、匠と協働して継承・創造することについて実践的な研究を行い、未来へつなぐための方策を導き出す。

上記教員特別研究の成果（2017～2019年度）は『研究成果報告書』（静岡文化芸術大学学術リポジトリ＞特別研究費）に研究課題別にまとめられている。

本学デザイン教育において、伝統建築・伝統工芸を継承してきた匠（技能者）の基本的な技や知識を研究・修得することは、日本のものづくり文化を理解して、現代・未来のデザインの在り方の本質を問い直し、創造することにつながる。そのためには、高度な技能を備えた「匠」「研究者」「デザイナー」（本学教員・学生）が共通言語を得て共同創作することが重要である。その在り方は、分野や目的によって異なるが、ユネスコ無形文化遺産に登録された日本の「伝統建築工匠の技」や、手仕事による「工芸＝KOUGEI」は、海外からも注目を集めている。ものづくりの現場は、道具や材料を作り続ける多くの人との連携によって成り立っており、そのものづくりの一員になれる人材が次世代のニー

ズに応えた革新的な展開を生み出しつつ、匠の継承問題にも変化をもたらすであろう。

匠領域教員（伝統建築、染、木漆芸、織、金工（着任順））は着任以来、２～７の実践的な研究に取り組んできた。

２．伝統建築を通した教育・研究・地域連携
３．匠領域における「工芸」「匠」の位置づけ
　：「手の愉悦ー革新する工芸ー」展をめぐる概念形成
４．匠ものデザインプロジェクト
５．地域連携事業について
６．教育プログラムの検証ー織の視点から
７．文化財を活用した授業展開

本稿は、デザイン教育の中で各教員が専門的な立場から実践してきた教育・研究及び地域連携について報告するものである。

２．伝統建築を通した教育・研究・地域連携

新妻　淳子

2018年度から公開講座･ワークショップ、教育、研究、地域連携を実践的に推進してきた。2019年度の教育特別研究から、次の3点について意識的に進め、継続的に研究することの重要性を2022年度は強く認識することになった。

①深める研究（匠の技の継承：研究・記録・分析）
②つなぐ研究（匠×研究者×デザイナーのコラボレーション）
③地域の研究（本学を拠点とした伝統建築･工芸の在り方）

本稿では、A．匠公開講座・ワークショップ（①②）、B．日本の伝統文化を未来へつなぐ教育（②）、C．文化財建造物の教育普及と展示活用の共同研究（②③）、D．地域連携の可能性（②③）、E．オクシズ漆の里プロジェクト（①③）の成果について報告し、教育・研究、技術と文化の継承について考察する。

A．匠公開講座・ワークショップ：匠とデザイン

2019年の匠領域開設に先だって、日本の文化と芸術の中で継承されてきた「ものづくり文化」と大地の恵み「素材」について、本学学生や地域一般市民が学び、文化の継承と新たな創造へつなげる公開講座を2018年度から開催してきた。②つなぐ研究を推進する機会としてワークショップも併せて計画した。公開講座・ワークショップの概要を以下に記す。

【2018年度】
（１）学内ワークショップ「大工技術はじめの一歩」
　講師：飯田英夫氏・月原光泰氏（大工）　8月6日
（２）講演「伝統建築の美と技、そして未来へ」10月20日
　講師：藤井恵介名誉教授（東京大学）
（３）特別展示「木の匠展」　10月20日
　宮大工飯田英夫家所蔵 大工道具及び彫刻等
（４）公開ワークショップ「木造りの技術」　10月20日
　講師：藤井恵介名誉教授（東京大学）
　　飯田英夫氏・月原光泰氏（大工）
　※（１）（４）は拙稿「本学デザイン教育における伝統建築技術ワークショップの記録ー「大工技術はじめの一歩」と「木造りの技術」ー」静岡文化芸術大学研究紀要 VOL.20、2019年、参照。
（５）講演「「染色とは？」から古代伝統染色・茜色まで」
　講師：加藤良次教授（横浜美術大学）　12月8日
（６）公開ワークショップ「染織の技術ー浜松注染そめー」
　講師：二橋染工場　12月8日

【2019年度】
（１）講演「布のデザインと匠の技」　7月13日
　講師：藤井尚子准教授（当時）
（２）講演「日本を創った漆芸文化」　7月 27日
　講師：三田村有純名誉教授（東京藝術大学）
　トークセッション：三田村名誉教授×小田伊織講師
（３）学内ワークショップ「和釘を打つ、和釘を使う」
　講師：白鷹興光氏（鍛冶）　2月16日
　　藤井恵介名誉教授（東京大学）
　協力：武田学氏・村澤善登氏・河口倫啓氏・
　　月原光泰氏（大工）、山崎善史（大工道具卸）
　座談会：「伝統建築と鍛冶」ワークショップ参加者、
　　曽根秀一准教授（当時、本学文化政策学科）
　※（３）は拙稿「伝統建築技術ワークショップの記録「和釘を打つ、和釘を使う」」静岡文化芸術大学研究紀要VOL.21、2020年、参照。
（４）学内特別講座「千年の釘を語る会」　2月17日
　講師：白鷹興光氏（鍛冶）
　　釼持夏海（国際文化学科3年（当時））
（５）学内ワークショップ「シルバージュエリー制作」
　講師：海野えり子氏（ジュエリー作家）

【2020年度】オンライン公開講座
（１）講座「手の愉悦～革新する工芸」展を語る」
　Ⅰ　展覧会の成り立ち
　　講師：大岡淳氏（静岡県文化プログラム県域プログラム・ディレクター）、山本一樹教授(当時)、藤井尚子教授
　Ⅱ　手にこだわる作家の仕事場
　　講師：大岡淳氏、山口剛氏(陶芸家)、星野順啓氏(本学非常勤講師)、藤井尚子教授
　Ⅲ　革新する工芸展を作る
　　講師：大岡淳氏、礒村克郎教授（本学デザイン学科）、藤井尚子教授
（２）７名の作家ギャラリートーク
　作家：山口剛氏(陶芸)、稲垣有里氏(染織)、藤井尚子教授(染織)、小田伊織講師(漆芸)、山本一樹教授(金工、当時)、海野えり子(ジュエリー・本学非常勤講師)、髙橋あずさ(ジュエリー)
　※令和2年度オンライン公開講座
　https://www.suac.ac.jp/researchcenter/interact/regior/lecture/
※展覧会については第3章参照。

【2021年度】
（1）講演「伝統建築の技～松ヶ岡の建築から」
講師：浜野豪氏（京都伝統建築技術協会）
トークセッション：「伝統建築の技の継承」
浜野豪氏×曽根秀一教授（本学文化政策学科）×筆者
※オンライン公開講座（8月3日～12月末配信）
（2）ギャラリートーク「風の記憶2021」　11月13日
講師：山本一樹教授（当時）
卒業生山浦陽介氏・前田直樹氏・マノミホ氏
（3）トークセッション「匠とデザイン」　11月28日
講師：山本一樹教授（当時）、藤井尚子教授、荒川朋子准教授、小田伊織講師、筆者
（4）学内講演「予想外だった経糸・緯糸　12月5日
―作品が教えてくれる次にすべきこと」
学内ワークショップ「二重織
ピックアップワークショップ」
講師：鈴木純子准教授（武蔵野美術大学）
（5）学内講演「遠州織物のレシピ」　12月13日
講師：濱田美希氏（古橋織布有限会社）
※（4）（5）は第6章参照。

【2022年度】
（1）講演「鉄の伝来と木の文化
－日本の文化を創り伝える」　12月10日
第一部　基調講演「鉄の伝来と日本の文化」
講師：村上恭通教授（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター長）
第二部　パネルディスカッション「鉄の伝来と木の文化」
講師：村上恭通教授
「大工道具と木の建築」麓和善名誉教授
（名古屋工業大学）
「静岡県の鉄の文化と木の文化」鈴木一有氏
（浜松市 創造都市・文化振興課）
「復元道具から見える文化」（対談）
白鷹興光氏（鍛冶）×筆者
司会：筆者
（2）実演公開「匠の技を知る「和釘を打つ！」」
・和釘を作る 講師：白鷹興光氏（鍛冶）12月11日
・和釘を使う 講師：月原光泰氏・橋本工氏（大工）
（3）学生ワークショップ「鉄と木の文化」　12月11日
・和釘を作る 講師：白鷹興光氏（鍛冶）
・和釘を使う 講師：月原光泰氏（大工）
・座談会「鉄と木の文化」参加者

ユーラシア大陸から日本に鉄が伝来したのは弥生時代のことで、鉄器の破片を磨製石器のように磨き道具としたことに始まった。日本では小型の加工用の鉄器の制作が行われるようになり、弥生時代の建築や木製品、土木技術は急速な発展を遂げた。鉄器や炉の出土は、西日本に集中しているが、浜松市の伊場遺跡からは漆塗りの木製鎧が出土しており、その精緻な紋様には驚かされる。その後、大工道具としては、釿、槍鉋が多用され、江戸時代にようやく台鉋が活躍することになる。戦国時代、競って建築された天守閣は、上記の大工道具を併用し迅速に建てられていたことも解ってきている。出土された鉄器の復元に挑む白鷹氏は、木材の痕跡から利き手や使いやすい角度を読んで制作している。遺物の中には、物凄く薄く加工したものや、どのように作ったのか解らないものもあるという。日本の文化を護り、追究することで、未来へ創り伝えることができるということを再認識する２日間の講座となった。遠州における鉄と木の文化は、ものづくり文化において重要であり、研究を進めて行きたい。

B．日本の伝統文化を未来へつなぐ教育

2018年から３年間、小学生へ和釘に関する授業を行う機会を得た。また大学生は、小学生の時に学んだことや感動した経験が記憶に残り、それぞれの心の糧となっていることも解ってきた。そこで、大学以前の未来へつなぐ教育の重要性を実感することとなり、筆者の伝統建築という専門分野から小中学生の探求心を育てるプログラムの実現を目指した。「静岡浅間神社江戸後期再建史料に見る建築普請活動に関する研究」（JSPS科研費19K15191）の研究成果を、小中高校生が、直に見て、聞いて、触れて、科学のおもしろさを感じるプログラム「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の助成を受けて、小中学生に研究のおもしろさの体験、また職人技のすごさを実感してもらうプログラムを実施した。

【日本建築と和釘のヒミツ！和釘を作って、和釘を使う】
（JSPS科研費21HT0117）2021年12月12日

日本の建築には釘一本使われていないと言われることが多いが、研究を進めている静岡浅間神社の建築にも釘が使用されている。日本の釘は、四角い断面をしていて「和釘」と呼ばれ、鍛冶屋が和釘を作り、それを大工が建築に使う。静岡浅間神社の造営関係史料にも釘に関する記述がみられることから、建築材料の一つ「和釘」に着目したプログラムとした。受講者は小学校５年生～中学生の親子。

（1）講義「日本建築と和釘」

静岡浅間神社研究で見えてきた建築と釘、そして人々のつながりについて理解を深め、静岡浅間神社の古文書解読にも挑戦した。受講者は「釘」という文字や「三」などの漢数字を発見すると、コツをつかんで読み進め、江戸時代後期に再建された静岡浅間神社の建築には、多数の釘や鎹（かすがい）が使用されていたことを古文書の解読を通して知った。

（2）講義「和釘作りを語る」

薬師寺復興のために千年の釘に挑んだ鍛冶故白鷹幸伯氏の次代興光氏に、和釘の歴史や、現代普及している釘との違い、鍛冶屋の仕事について語っていただいた。

（3）実習「和釘を知る」

日本建築の特徴である木組みと、和釘や鎹の役割について、実物模型や大工道具に触れ、職人の技を実感した。

（4）実習「和釘を作る」

鍛冶白鷹氏によって和釘と鎹を鍛造する実演が行われ、真っ赤に焼けた鉄の棒が鍛冶の腕によって、あっと言う間に形を変えた。受講者も白鷹氏の指導の下、和釘作りに挑戦し、鉄の音や叩き心地を体感した。

図2-2　和釘を使う

図2-1　鍛冶白鷹氏による鎹の鍛造

（5）実習「和釘を使う」

鍛冶が作った太くて四角い和釘を、大工がどのように建築に使うのか。大工月原光泰氏が和釘を打ち込む実演を行った。和釘をそのまま木材に打つと割れてしまうため、受講者は鍔鑿（つばのみ）で下穴を開け、そこに和釘を打ち込んでいった。和釘の角が木材の中で効き、接合された木材同士は、ほとんど動くことなく打ち止められ、一本の和釘の力を知ることができた。

（6）ディスカッション

受講者はプログラムを通して「3つのヒミツ」と「不思議」を見つけるという課題に取り組み、たくさんの「ヒミツ」と「不思議」が挙がった。大学生がグループの成果をまとめて発表し、鍛冶白鷹氏と大工月原氏にぶつけられた。参加者全員で「日本建築と和釘のヒミツ」を解き明かす一日となった。

小中学生の素直な気づきと柔軟に学ぶ姿は、日本の伝統文化を未来へつなぐために不可欠であることを実感した。また、参加者のアンケート結果から、ほぼ全員「おもしろかった」「わかりやすかった」「科学（学問）に非常に興味がわいた」と回答があった。何よりも筆者の研究を通して、科学に興味を持っていただけた点について、探求心を育てる取組みを継続する重要性を感じた。

2022年度は、「江戸時代における静岡浅間神社「二階拝殿」の建築形式・技術と駿府社会」（JSPS科研費22K04510）の研究成果発表の一環として、静岡浅間神社総合研究会と静岡市・静岡市歴史博物館との共催、オクシズ漆の里協議会後援で、子ども講座を開催した。

【静岡浅間神社なぞとき講座】（JSPS科研費22K04510）
2022年9月10日

本プログラムは、研究フィールドである静岡浅間神社を会場として開催したもので、「3つのなぞ」と「不思議」を見つけるというスタイルを継承して行った。

（1）なぞ1：古文書

筆者が研究を進めている『御再建場所日記』から静岡浅間神社の建築を読み解くもので、古文書の解読については、静岡市歴史博物館学芸員の増田亜矢乃氏に講師をお願いした。建築に関する用語の解読のため、少し難しい課題となったが、コツをつかんで皆で考え解読できた時には、暗号が解けた喜びがあった。

（2）なぞ2：神社の秘密

解読した古文書を手に、重要文化財建造物26棟で構成される静岡浅間神社境内で「神社の秘密」を探った。神部神社浅間神社本殿を参拝し、江戸時代後期に記された建築の記録を踏まえて、現在の社殿に潜む秘密を発見した。例えば神部神社浅間神社本殿の彫刻「碁打仙人」は立川内匠（初代立川冨棟）、「天人」は和蔵（二代立川冨昌）、「息吹仙人」は弟子市蔵、「鷹」は当所（駿府）文助・相三の仕事であること。「二階拝殿」とは？静岡浅間神社の二階建ての文化財は、楼門と拝殿の2棟で、後者のことである。建物の見方や用語についても神社建築から学ぶ機会となった。

（3）なぞ3：200年前の技

静岡浅間神社の建造物群は、約200年前の文化元年（1804）から幕末までに順次建てられたもので、神部神社浅間神社回廊の保存修理工事が現在進行中である。講師は、保存修理現場の設計監理を担当している文化財建造物保存技術協会の矢野冬馬氏にお願いした。漆塗りの回廊の修理は、傷んだ漆を掻き落とし、建築当初の技法を調査・研究した上で、現代の職人によって忠実に再現されている。200年前の技を理解して継承し、次の修理の際にも同じように行わねばならない。建造物は建ち続けるだろう。一方、職人の後継者や、国産漆・木材など材料の確保が大きな課題となっており、静岡市では、漆を核としたプロジェクトを始動している（E参照）。受講者は、建物全体が漆で塗られる様子、金箔を貼る技などを見て驚きつつも、様々な質問が挙がった。

（4）ふりかえり

受講者によって「3つのなぞ」と「不思議」が発表され、参加者全員で謎を解いて終了した。歴史研究に始まり、建築史研究、文化財の現場までがつながりをもって進められ、その背景にも多くのつながりがあることを実感できる講座となったと確信している。

両プログラムとも小中学生と保護者を対象に開催することも重要な点であった。科学研究や日本の伝統文化の継承は、途絶えることなく推進されなければならない。小中学生から日本のものづくりの技を有する人々までが、伝統文化を支える一員であるということ、その底辺を広げる活動として、2023年度も継続できるよう準備を進めている。

C．文化財建造物の教育普及と展示活用の共同研究 ー旧田代家住宅プロジェクト

2021年度より文化財建造物の教育普及と展示活用について国登録有形文化財「旧田代家住宅」を対象に浜松市（文化財課・天竜区まちづくり推進課）と本学で共同研究を行っている。旧田代家が所在する浜松市天竜区二俣町鹿島は、天竜川中流の木材拠点で、当家は筏問屋を営んでいた。安政東海地震後の安政6年（1859）に建てられた木造2階建の旧田代家住宅主屋は、良質な木材で組み上げられた大型の民家で、遠州地方の特徴と生活文化を今日まで伝える文化財である。

【学生作品展「てこころ展」】（2021年7月22日～25日）

2021年度から、旧田代家住宅を場に定めた学生作品展

を、デザイン学科匠領域の領域専門演習（３年生）で開催している。伝統的な建築・工芸を基礎にした匠領域としての最初の専門演習である。建築と手仕事によるものづくりの教育を融合して実践的に行う挑戦だった。

匠領域３年生13名は、田代家、天竜川、二俣城跡及び鳥羽山城跡等について理解を深め、実際に天竜川と鳥羽山の豊かな自然に囲まれた旧田代家住宅を訪れて、川の流れ、屋敷地の感覚、薄暗い土間、座敷と庭のつながり、光と風の心地よさなどを身体で感じた。旧田代家の空間とそれぞれの想いをつなげ、それぞれの手を用いて創り上げる「てこころ展」を計画した。展示の計画には、旧田代家住宅の建築と庭を正確に把握する必要があり、建築・環境領域４年生が図面を作成、建築模型（起こし絵図）の制作を担当した。デザイン研究科１年生によって作品展示の様子がイメージパースで表現された。展覧会当日を迎えた旧田代家の屋敷は、学生による新たなしつらいを表現した空間に変わった。作品によって色と動きが添えられた家屋からは、時代を超えた新たな営みを感じ、庭に展開する作品は、日常とは異なる庭の景色を創り、庭へと導いた。作品は空間に溶け込み、文化財に活かされ、文化財を活かした。

図2-3　旧田代家住宅正面「てこころ展」

図2-4
庭と作品

図2-5
室内の作品

浜松市と本学によるこのような取り組みは、地域文化財を会場としてイベント等を実施し、特別な体験をする「ユニークベニュー」活動として注目されており、2022年度も学生作品展「鹿の子展」として開催した（第７章参照）。

【地域連携演習「旧田代家住宅活用プロジェクト」】
（2022年度前期）

「鹿の子展」と連携して2022年前期地域連携演習「旧田代家住宅活用プロジェクト」を始動させた。デザイン学部デザイン学科３年生１名、２年生２名、１年生３名、文化政策学部文化政策学科１年生１名、芸術文化学科１年生２名の計９名で、旧田代家住宅の活用を推進する活動と提案を行った。

最初に西鹿島駅（遠鉄電車）、天竜川、旧田代家住宅、二俣城跡及び鳥羽山城跡、二俣の町、二俣本町駅（天竜浜名湖鉄道）を歩いて理解し、旧田代家住宅と地域の課題を導き出し、各自取り組むテーマについて検討を行った。

7月の展覧会と連携した取り組みとして、デザイン学科の学生が中心となり、旧田代家住宅主屋の模型（起こし絵図）を制作し「鹿の子展」の展示計画を表現した。展覧会に向けて、旧田代家屋敷内の整備活動及び各部屋の清掃、展覧会時の所蔵品の展示や部屋の見せ方の検討を重ねた。主屋の背面から続く鳥羽山の石垣や、季節の移ろいを伝える庭も併せて楽しんでもらいたいと、主屋を周遊する仕掛けとして、背面通りの２室を鳥羽山に向けて開放して、裏庭と鳥羽山の緑を室内に持ち込むこととした。さらに背面の１室「寝間」には所蔵品とともに学生の作品が展示された。プロジェクトメンバーも展覧会の見学を行い、所蔵品以外の作品で彩られた旧田代家住宅を見て、今後の活用について考える機会となった。

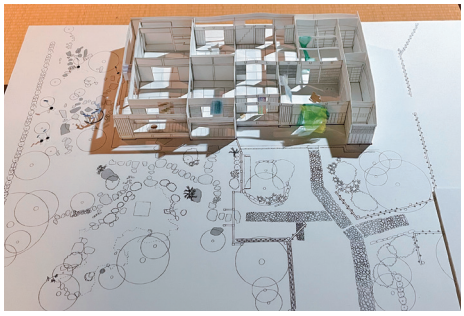

図2-6　旧田代家住宅「鹿の子展」計画模型（起こし絵図）

図2-7
整備活動

図2-8
展示ワークショップ

図2-9
展示作業

図2-10
展示状況

旧田代家住宅の展示を考えるワークショップ（8月27日）を、文化政策学部芸術文化学科の立入正之教授のレクチャーを受けて実施した。改めて鹿島田代家交流振興会の方から旧田代家住宅について説明をいただき、実際に展示されている所蔵品とその空間、展示方法（ライティング、キャプション等）について各自課題を提示し、意見交換を行った。その場で改良可能なことについては、立入教授の指導の下、参加者全員で展示作業を行った。

本プロジェクトは、旧田代家住宅及び地域の現地調査に始まり、「鹿の子展」との連携、建築調査、展示ワークショップを通して、各自が旧田代家住宅の活用に関する提案をまとめた。その成果を、浜松市文化財課、浜松市天竜区まちづくり推進課、鹿島田代家交流振興会の皆様へ、学生有志が発表を行った。提案の中には、大学生が関わることで実現可能なものや、将来的に実現させたいもの、ゆっくり滞在してもらうための工夫、庭をたのしむリーフレットなどがあった。今後も地域連携演習として継続し、今年度の提案の実現に向けて、つなぐ教育を推進したい。

２回目として開催した学生作品展は、地域連携演習の協力もあり、来場者の皆様から、２年目らしい展覧会となったと感想をいただいた。前年度の経験を基により良い展覧会を創ることを引き継いでいきたい。

D．地域連携の可能性

本学には、文化政策学部とデザイン学部の学生が地域と連携して課題に取り組むプロジェクト「地域連携演習」（全学科目）がある。両学部の学生がそれぞれの興味でエントリーし、共同で進めるプロジェクトは、本学の特徴的な在り方を現しており、大学の教育としても、地域への貢献としても、重要な活動であると筆者は感じている。

【地域連携演習「森町歴史伝統文化保存・活用・整備プロジェクト」】（2019年度）

2019年度は、森町歴史伝統文化保存会と連携して、森町の歴史伝統文化の拠点である寺院や旧旅館の整備活動を行った。整備活動は、保存会の皆様にご指導いただきながら掃除や障子張り等を行うことで、建物が呼吸し、磨かれることを学生たちは体験しただけでなく、森町の歴史伝統文化を、人とのつながりのなかで学ぶことができた。また、重要文化財友田家住宅で行われた小学生対象のふるさと学級に大学生が初めて参加し、小学生と一緒に掃除をして、竈（かまど）でご飯を炊き、カレーを作る体験をした。異なる年代の教育と文化継承を目的として文化財建造物を活用する形は大変意義深く、その後も継続する予定であったが、コロナ禍により中断しているのが残念である。

【地域連携演習「見付宿まちの魅力創出プロジェクト」】（2022年度後期）

2022年度前期には「旧田代家住宅活用プロジェクト」（C参照）、2022年度後期からは「見付宿まちの魅力創出プロジェクト」をスタートさせた。見付宿は、東海道五十三次の28番目の宿場町で、現在も東海道が東西に走り、南北に小路（しょうじ）が延びる町の構成が継承されている。見付宿の中央には、遠江国総社の淡海国玉神社と旧見付学校が位置し、磐田市文化財保存活用地域計画において見付地区は、重点的に保存・活用を推進している地区の一つとして位置づけられている。本プロジェクトは、まちおこし・まちづくり活動を推進している「見付宿を考える会」と磐田市と連携して活動するものである。筆者は、2019年から見付地区「蔵」悉皆調査に参画し、引き続き見付の建築調査を進めている。建築調査に参加している学生たちは、10月29日・30日に開催された「見付宿たのしい文化展」で調査対象の建築についての説明役を担った。今後は、見付のまちの現状を調査し、これからの見付のまちづくりの可能性について探り、望ましいありかたについて提案を行う予定である。

図2-11　見付宿たのしい文化展

【伝統建築技術演習「松ヶ岡建築調査」】（2020年～）

2020年からは、掛川市のご協力により、伝統建築技術演習（後期集中講義）で掛川市指定文化財「松ヶ岡（旧山﨑家住宅）」保存修理工事現場見学及び実測調査、起こし絵図（建築模型）の制作を継続している。文化財建造物の解体修理は、傷んだ建築部材を解体することで修理を施すもので、建築当時の構造や技術を学べる絶好の機会である。しかも修理の段階によって見るべき部分が変わるため、完成までに何度も訪れる価値がある。市民にとって修理中は、閉館した施設でしかないが、定期的な現場公開を行い、多くの市民が建築的な価値を学ぶことは、完成後の建築への関わりにつながる可能性がある。集中講義における学びの成果として、年に一度、起こし絵図を市民ボランティアの皆様に発表する機会をいただいている。図面が完成した部

屋から模型にして、部屋を連結させている。模型にすることで、部屋の空間を誰でも把握することができ、建築空間そのものを再認識するきっかけともなっている。市民ボランティアの皆様から毎年楽しみにしていただけるよう、模型の完成を目指して、学生の学びも進めたい。

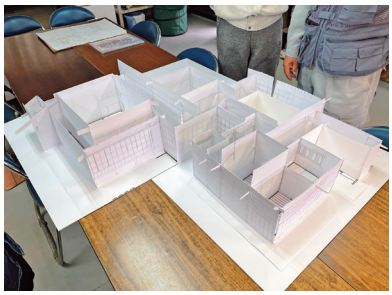

図2-12
松ヶ岡起こし絵図

E．オクシズ漆の里プロジェクト

静岡県は、静岡市を中心に漆器産業が盛んであった地域であり、漆塗りの国宝・重要文化財建造物が久能山東照宮及び静岡浅間神社の社殿で計35棟が伝わっている。2015年、国宝・重要文化財建造物の修復には国産漆を原則として使用することについて文化庁から通達があり、静岡市の文化財を護るために国産漆の確保が大きな課題となった。それをきっかけに2019年に「オクシズ漆の里協議会」が発足し、漆の植樹から漆塗りという範囲を超えて、木材としての漆、天然染料としての漆、食材としての漆、さらにその輪は広がり、漆を核とした持続可能なサイクルを目指して活動が継続されている。2020年から「漆」について幅広く学ぶ機会として「漆の学校」が開校され、「漆と日本文化」というテーマの中で「暮らしに息づく漆の文化」（小田伊織講師）と「静岡浅間神社社殿と漆」（筆者）について講義を行った。オクシズ漆の里協議会のプロジェクト概要には、「漆」のつながりが示されていて、作り手から使い手まで様々である。筆者は文化財建造物に関わる立場から「漆」の輪に参画している。漆の文化財建造物に直接関わるのは、修理の際に漆を塗る職人ではあるが、建造物を取り巻く空間には、人が集い、護り伝えており、その地を訪れる誰もがその輪の中にある。長い歴史の中の一員であることを意識し、未来の人々へ同じ想いを伝えること、誰もができる役割を担ってほしいと思う。大学も「漆」の輪に入ると同時に、大学を拠点とした地域研究について、歴史・文化・背景までを概観した上で、つながりの輪の連鎖の可能性までを描き推進していく必要があると考える。

まとめ

2017年より、①深める研究、②つなぐ研究、③地域の研究を意識して、A～Eの教育・研究活動に取り組んできた。

A．公開講座・ワークショップについては、学生及び地域に向けた①深める研究を発表する場であると共に、③地域研究の拠点であることが浸透しつつある。また、ワークショップによって②つなぐ研究を実践している。

B．日本の伝統文化を未来へつなぐ教育については、次世代の担い手となる小中学生のみを対象とするものではなく、大学生、親世代、技を継承する世代までが、未来を見据えて考え、応援する活動の一端を担う必要がある。

C．文化財建造物の教育普及と展示活用の共同研究については、旧田代家住宅のプロジェクトを全学的な活動として継続し、他の文化財での展開も期待されている。

D．地域連携の可能性は、③地域の研究をきっかけに①深める研究として本学教員が参画し、②学生が地域で活動し貢献する形が出来つつあり、大学を拠点とした地域研究の輪を作り、連鎖させることを目指して推進したい。

E．オクシズ漆の里プロジェクトは、漆を核とした作り手から使い手、さらに漆の建造物に集う人までの輪を描いている。

以上の教育・研究活動は、様々なつながりの中で、継続することでの成果であり、②つなぐ研究を理解して、学生・教員・卒業生が様々な輪の一員となることが重要である。

3．匠領域における「工芸」「匠」の位置づけ：「手の愉悦－革新する工芸－」展をめぐる概念形成

藤井　尚子

本展覧会（以下、「本展」、「『手の愉悦』展」）は、2021年10月9日から25日までのおよそ２週間、静岡県ゆかりの工芸作家33名の作品を、本学ギャラリーにて展示したものである。

東京オリンピック・パラリンピック2020に関わる文化プログラムの県域事業「静岡県域文化プログラム」の一つであり、静岡県ならびに遠州地域のものづくりの伝統と現在を紹介することを目的に計画された。「手の愉悦」展と関連企画「先端技術展―技人たちの物語」（同年12月10日から23日、於本学ギャラリー）は、ものづくりの素地を「工芸」と「工業」に照準し示すことを試みている。これらについては、展覧会図録『手の愉悦－革新する工芸－展』（静岡文化芸術大学）に詳しい。

本稿では、本展のキーとなる「工芸」ならびに「匠」の概念形成について着目したい。方法は、本展の計画のなかでどのように捉え定義したのか、そのプロセスをとおして考察を試みる。

本展の準備は2018年頃より開始され、翌年新設される匠領域に所属予定の教員（山本一樹教授・新妻淳子講師（当時））と、県内で活躍する工芸作家（山口剛氏・稲垣有里氏）を中心に、工芸の専門分野や作家を互選し検討を進めていた。2019年からは匠領域に着任した新たな教員（小田伊織講師・筆者）も加わり、県域文化プログラム・ディレクター（大岡淳氏）も交えながら、展覧会のコンセプトを検討し、当初予定の2020年7月開催に向け、招聘作家への依頼準備をしながらも、新型ウィルス感染症拡大のため一年後の開催となった。順延されたこともこれらの概念形成の過程に少なからず影響があると考える。

「工芸」：展覧会タイトルにみる主体の変遷

当時の展覧会名は「静岡県文化プログラム　共創プログラム『伝統工芸品展（仮）』」であった。これは2019年5月頃まで仮称されていたが、そもそも静岡県文化プログラムの分類に拠るところが大きい。「地域とアートが共鳴する」をテーマとした「文化の祭典」の文化を、［演劇・舞踊］［美

術］［音楽］［映像］［伝統芸能］［食文化］［アート・プロジェクト］［教養］の８分類（「静岡県文化プログラム2020ガイド」より）とし、［美術］のカテゴリーの一つに当該企画があった。なお、［美術］のその他の企画は、美術館を中心とした企画展・所蔵品展示や、市民文化祭、地域の芸術祭などアートイベントなど、展示品やイベントの成果物といった、いわゆる「作品」を主体とした展示である。仮称にある「伝統工芸品」から、県ならではの伝統的工芸品の展示が当初の構想にあったと考えられる。しかし、「工芸」をめぐる広義の概念においては、伝統的工芸品は工芸的範疇の一つであり、概念はより狭義なものとなる。このことは、穿った見方をすれば、学びの体系の一つとして「工芸」を標榜しようと新設された、匠領域における「工芸」の概念とも受け取られかねないであろう。

それでは、工芸作家を軸に本展を構成した背景には、どのような「工芸」の概念があったのか。山本の「工芸作品はどの分野もその歴史は古く、古の昔から、先人たちがその素材を扱うために様々な試みをした歴史が伝統技法として積み重なっています。作家はその歴史を遡り、研究、体験、修得した上で、各自のオリジナルの表現を見出していきます」（本学広報誌『文化と芸術vol.30』2020年3月号より）といった言説から、「工芸」はあくまでも素材に対する知や、それらを加工する技法の知の連なりの上にあり、この積み重なりを「伝統」とし、その最前線に現在を生きる作り手がおり、模索の現在進行形としての「作品」があると捉えていると読み解くことができる。このことからも、作品の重要性は言わずもがな、しかし、伝統技法を基盤に各々が見出す表現を獲得するプロセスに「工芸」の特徴があると捉え、展覧会の主体を「作品」から「人」にシフトし、県ゆかりの工芸作家に着目していくこととなったと考えられる。

「匠」：主体の所在

もう一つのキーである「匠」については、「工芸」以外のものづくりとも関わりがあることからも、さらに慎重な議論が必要である。とはいえ、昨今では比較的軽やかに用いられる言葉の一つとなりつつあって、例えば「〇〇の匠」といったように、ある物事に熟達した玄人や専門家と同義の扱いが見られる。それでもやはり「職人」「工人」といった一つの手技に秀でた専門職の印象は強く、本学匠領域においても職人養成を目指しているとの誤解も、いまだに少なくない。

本展では主体を「人」に据えて「工芸」を把捉しようとしたことは、先述のとおりである。着目した主体は、伝統技法を基盤にしつつも、各々の制作過程の気づきを模索し、新たな表現へ展開する姿勢を所在としている。「職人」と「工芸作家」はいずれも伝統技法の体得から始めることは共通しているが、しかし、複製を可能とする精確な手技か、失敗を許容し試行を可能とする手の経験値か、最終的に修得しようとする「手」は異なるベクトルにある。

本学匠領域のめざす育成人材像は、もちろん職人の排出ではなく、そうではあるが職人になろうとする者がいても良い。いずれもめざすべきは、素材とそれに見合う加工技法の基本を体得した上で、企図に合わせ応用・展開できる能力の涵養であり、究極的には身体性の獲得である。すなわち「匠」とは、身体を所在とした主体であり、特に、素材と自己が身体的に出会う「手」は、文字どおり世界を知り拓く手がかりとなるのである。以上が、本学で開催される工芸展のタイトル「手の愉悦」に込められている。

まとめ

本稿では、「手の愉悦」展をめぐる、本学匠領域での「工芸」と「匠」の概念形成の一端に言及した。その上で、工芸をめぐる「伝統」や「作品」の概念を再考し、関わる主体がいかにして身体性を獲得するかが重要であることを示した。

この視点は展覧会図録『手の愉悦―革新する工芸―展』にも反映されている。図録は、当初は展覧会の記録として、展覧会後に出版予定であった。しかし展覧会の内容を検討していくにつれ、展覧会の出品作品図録として展覧会前に出版する方針となった。図録構成は、「陶芸」や「染織」といった工芸一般の種別ごとに一作家につき見開き２頁の右ページを作品撮像に充てているが、そのほかにも、取材許可を得た一部の作家の工房の様子や道具類が掲載されている。工房や道具類に見られる小さな工夫からも制作に対する姿勢を窺い知ることができるとともに、各々の考え方の相違点が工芸の豊かさを生み出していることを浮かび上がらせた。また、道具をめぐる身体性こそが、工芸制作の要ともなっていることへの気づきを得ることができるであろう。

図3-1　「手の愉悦」展　会場風景（本学ギャラリー）

図3-2　展覧会図録『手の愉悦－革新する工芸－』展』抜粋

４．匠ものデザインプロジェクト

小田　伊織

本事業は2019年度より、静岡県の伝統産業活性化を図るため、静岡県経済産業部商工業局地域産業課からの依頼を受け開始した。生産者が抱える課題や問題点を分析し、伝統工芸技術を活かした新たなものづくりや販路開拓に取

り組むことを目的とし、静岡県の伝統産業を支える生産者と本学の学生、教員、さらには本事業のためにプロデューサーを招き、地域社会との連携により事業を行ってきた。

地域連携演習においての取り組み

2019、2020年度に関しては「地域連携演習」のプロジェクトとして静岡県の工芸品や本学デザイン学科の匠領域に関心の高い学生を募り、「東海道リバイバルプロジェクト」として本事業を行った。

2019年度は、岸本挽物製作所の岸本真紀氏、クリエイティブディレクターの金谷勉氏を迎え、「挽物技術」を活かした製品作りに取り組んだ。

2020年度は、新型コロナウィルスの影響で、対面でのミーティングや指導が制限されたため、新製品の提案ではなく、静岡県内の複数の伝統工芸技術を広く周知することを目的として事業を実施。駿河竹千筋細工、駿河指物、駿河塗下駄、浜松注染そめの各生産者の工房を視察。「浜松まちなか賑わい協議会」の清水英貴氏にもご協力いただき、リーフレットデザインの検討を行い、小・中学生を対象としたリーフレットを作成・配布した。

2021匠ものデザインプロジェクトとして再始動

2021年度には静岡県からの受託事業となり、「匠ものデザインプロジェクト」として再始動。静岡県の伝統産業活性化と新たな製品開発を目的とし、本学学生のデザインを基に、生産者やデザイナーと共に「指物技術」を活かした新たなプロダクト製品のモックアップ制作に取り組んだ。

匠領域にて木漆・陶芸を専門に学んでいる３年生が事業の中心メンバーとなったことで、これまで課題となっていた「生産者の工芸技法を活かしたデザイン提案」を実現できている。

図4-1　指物工房への視察

指物職人の戸田勝久氏、プロジェクトコンシェルジュとしてプロダクトデザイナーの花澤啓太氏ご協力のもと、ディスカッション、マケット制作、プレゼンテーション、サンプル制作、モックアップ作成、パンフレット作成等、考案から成形に至るまでのプロダクトの成り立ちを学ぶことができた。

図4-2　デザイン案の検討

また、製品完成披露発表を行う会場ともなる「駿府匠宿」を事前視察し、戸田氏指導のもと鉋引きの体験を通して伝統技法への理解を深めてきた。技法への分析と考察を足がかりに、技術や素材の特徴から引き出される独創的なアイデアが多く見受けられた。技法体験の重要性と、本プロジェクト固有の教育的価値を改めて認識した。

最終的には、《指物リバーシ》というアイデアが採用された。西洋の寄木のチェスから着想を得て、受け継がれる「遊び」と「指物技術」を関連づけたデザイン性が評価された。木目や木肌を活かし、象嵌などの要素を多く取り入れ、職人の技術力と学生の発想力が結びついたプロダクトである。

図4-3　最終成果発表の様子

2022年度の実施内容と成果

2022年は駿河漆器の藤中知幸氏、昨年度に引き続き花澤氏にもご参加いただき、デザイン学科 匠領域学生３年生５名が新たに匠ものデザインプロジェクトに取り組んでいる。今年度は、「漆芸技術」を用いた新商品のデザイン提案を行う。日常生活においての用途性を重視し、漆素材の実現性に優れた提案を行うチームと、漆素材では従来見られなかったような、チャレンジングなデザイン提案を行うチームの、２つの思考型に分かれて検討を進め、互いのチームのデザイン評価を行う。複数のデザインバリエーションを考案することにより、デザイン思考に柔軟性をもたらすことができる。また、職人・プロデューサー・学生の３者それぞれの意見を交換しながらブラッシュアップを行うことで、多角度からデザインを展開できている。

まとめ

本稿では、2019年度より行ってきた、静岡県の伝統産業の活性化を目的とした地域連携事業の現状について記述してきた。

年度ごとの内容に差があるものの、事業の継続によって、学生の地場産業への理解や、デザイン思考の深度が高まってきている。現代の世相を反映するような学生の革新的なアイデアと、実際に製品開発を行うディレクターやプロデューサーの視点が交わることで、特殊な造形性や用途性と実用性を合わせ持ったデザインが生み出されている。

日本の文化、および静岡県の文化について実地でリサーチを行った結果、学生各々のデザイン思考に変化が見られている。机上のデザインに留まらない、製造プロセスに準じたきめ細やかな考察が、プロダクトデザインの精度を上げている。

また、職人やディレクターとの意見交換の中で、地域社会と結びついた「ものづくり」の視点を得ることができた。

さらに、自身が関わる地域の問題解決という事業の目的が、通常授業の中では得られないリアリティーを持ったデザイン＝答えを導き出しているといえる。

本プロジェクトでは、若い世代、特に伝統的な素材や技法に興味を持って学んでいる匠領域の学生が、地場産業の現状を知り、次世代のニーズに合った新たなモノ・コトへの展開によって、地域社会へ貢献することができている。後継者不足という観点からも、新規的なデザインが、地場産業に馴染みのない若い世代を触発し、接触機会を増やすことが期待できるだろう。

今後も継続して工芸分野に携わる地域の方々との協働を行い、匠領域のカリキュラムの独自性を活かしたデザイン提案によって静岡県の工芸産業の活性化を図っていくことができると考えている。

図4-4　2021年度 提案プロダクト《指物リバーシ》の展示

5．地域連携事業について

荒川　朋子

地域連携・地域貢献についてA～Dの活動事例を通して、遠州地域との関わり方の可能性を考察する。

A．創立20周年記念企画：「わ・の・わ　ー人からはじまり人にかえる布、遠州織物ー」展

B．綿の産地フェア　はままつ染め織りマーケット

C．産業織物と手織物の各比較分析によるデザイン融合提案の研究ー遠州織物の織設計に基づく調査、推定復元よりー

D．染織の現場を巡る、遠州産地バスツアー

A．創立20周年記念企画：「わ・の・わ　ー人からはじまり人にかえる布、遠州織物ー」展

本展覧会は、遠州織物の工場から端切れを分けていただき、洗濯、乾燥、縫製の工程をふみ、パッチワークし、20種類くらい、大きいものでおよそ幅3.8m高さ2.6mのオブジェとして再生し展覧した。各々の工場ごとに提供された布でオブジェを創ることで、各工場の特色が強く出ており、広く地域一般の人にも遠州織物・遠州産地の個性や美しさを伝えられる機会となる。カタログ冊子を作成した。

図5-1　カタログ　表紙

図5-2　カタログ　モデル着用時の一部抜粋

多種多様な遠州織物を一堂に会する

筆者が本学に着任してすぐの2021年5月はじめ、文字通り右も左もわからず、マスク着用で皆の顔がほぼ同じに見えるような時期にお声がけいただき、伊豆裕一教授（当時）、谷川真美教授、藤井尚子教授と共にコロナ禍で延期になっていた展覧会の企画メンバーに加わった。「遠州織物」「ギャラリー展示」というキーワードがあり、コロナ禍の今に提案できる企画を再構築しブラッシュアップする作業から始まった。

上記でも述べた展覧会会場を彩った布は、各工場に「汚れていても形が不揃いのものも良いので、貴社の端切れを是非譲っていただきたい」というお声がけから集まった布たちである。時は過ぎ、すでに9月。各工場の賛同を得ら

れるのか、どんな布が集まるかも未知であったため、その結果から、どのようにアイデアを調整し展示に活かせるのかイメージが膨らみながらも…さすがに保険をかけ（別方法を考案）、皆で大きな期待と不安の日々を過ごした。

そしてご厚意により徐々に集まった布は「洗濯→乾燥→アイロン→裁断→縫製」の工程を経て、小さいもので50枚、大きいもので130枚の正方形の布から一つのオブジェに形作られた。そしてそのプロセスでは提供いただいた布の魅力に深く感じ入り、大作に向かう覚悟が作られ、制作者冥利に尽きる得難い経験を得た。日本画家の友人曰く「絵筆を画面に置く時間より、小さな絵皿で膠（にかわ）を溶く時間がとにかく長い。そして大作を前にしていちいち小さな絵皿でその都度膠を指で溶いて絵の具を作るという、その長い時間の大切さがわかってきた」、そんな境地だった。

具体的には、生機（きばた）からの風合い変化、織物特有の色彩効果・構造・デザイン、各社の知、緻密な織設計について、五感を通して思考を巡らすことに始まった。それは産業織物として機械の印象が強い遠州織物が、いかに、人の手が関わり、それにより温もりや複雑さを生み出し、工場ごとに稀有なバリエーションが生まれているかということを理解し、素材と技術に寄り添った知恵の結晶・モノヅクリであるかに強く思いを寄せるということだった。

長らく遠州織物の仕事が、世界から深く信頼され流通し続けている理由が垣間見えるようだった。

各々の工場ごとに提供された布で成立つパッチワークされた人型オブジェは、あえて手が長くなっている。それらが会場で、結ばれ重なりあっているのは、遠州地域の繋がりを示しつつ、一方でコロナ禍において人との接触や繋がりを制限された中で考えさせられる「わ」「人の輪」「人の和」のメッセージも込められている。

チーム４名が各々の得意分野を活かした協働のもと、創立20周年記念企画を成功裏に着地させたことを確信しているが同時に、本学企画室、地域連携室はじめ、多くの関係者皆様の多大なご尽力とご協力によるものであり、心より感謝申し上げます。

図5-3　本学ギャラリーでの展示

図5-4　オブジェの長い腕を繋いだ演出の例

【会期】2021年12月3日～12日　【会場】静岡文化芸術大学ギャラリー　【主催】静岡文化芸術大学　【後援】一般社団法人 静岡県繊維協会　【協力】浜松市　【協賛】遠州織物工業協同組合　天龍社織物工業協同組合　浜松織物協同組合　古橋織布有限会社　高田織布工場　杉浦テキスタイル株式会社　ファブリック鈴忠　辻村染織有限会社　ケイテキスタイル株式会社　有限会社エム・村松ジャガード織物　有限会社高柳ウィービング　有限会社マサル織布　榛地織物　コーデュロイハウス　丸三織物合資会社　金原織布　三浦ジャガード織物　有限会社遠州ネット　【オブジェ制作】教員　学生　染色作家　計10名

B．綿の産地フェア　はままつ染め織りマーケット

Ａからのご縁が続き、遠州産地振興協議会主催（事務局：浜松市産業部産業振興課）の「綿の産地フェアーはままつ染め織りマーケットー」の全体監修を担当した。本件は、遠州織物のPRを目的としたマーケット、展示、プログラム等の開催を通じて最終消費者に対して多角的に遠州織物や遠州産地の魅力を伝えることにあった。

マーケット会場の空間設計・空間装飾を学内コンペで選ばれた３組７名のデザイン学科学生が担当し、出展者や関係者からたいへんに好評であったとのお言葉をいただいた。

ポスター・チラシデザインはデザイン学科学生２名が担当した。

地域貢献と学生

前年の「わ・の・わ」の展示作品をはままちプラスに展示する計画と同時に、浜松市ギャラリーモール「ソラモ」という、屋外空間における会場装飾の公募を実施し、選ばれた優秀作品３点で会場を構成することとした。

建築・環境領域の学生からは「クロスロード」と名付けた作品が提案されたが、それは店舗の全体的な配置を計画し、人の導線がぶつかる場所に交流スペースを設けるなど、織物をかたちづくる糸にかけて、幾重にも重なる糸のように、人の交流の場をつくる提案がされた。また、大きなオリーブの木を囲むように作られた伸びやかな木のフレームから垂れ下がる布の揺れは、会場の空気感をも表現されており、秋を感じられる晴天のもと美しい動きのあるオブシェとなった。

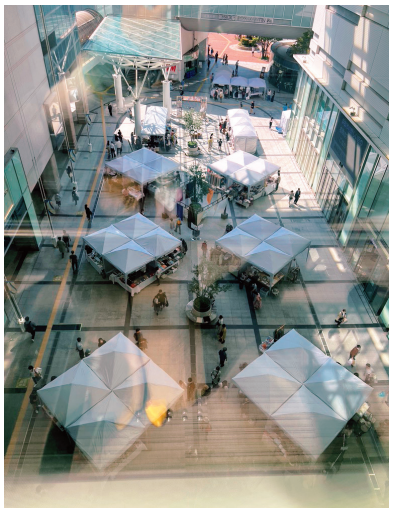

図5-5　45度傾けたソラモの店舗レイアウト

図5-6　布のはためきによる空間演出

図5-7　オリーブの木を囲む演出

図5-8　布ミミを用いたタペストリーによる装飾

匠領域の染と織を得意とする学生からは得意分野を活かしたオブジェが制作された。遠州織物工場より製作過程に生まれる布ミミを染め加工し、コイリング技法を用いた視覚的にも感触的にも楽しいゲートやオブジェを作った。また横断幕は臈纈染（ろうけつぞめ）の技法を用いて染め上げた。

もう１つの建築・環境領域の学生からは、マーケットにおとずれた人々が休憩する場所に遠州織物から作られたクッションをおくことで、手触りからもその魅力を伝えることをコンセプトに制作し、会場に柔らかな空間を添えた。

参加した学生からは、学内の授業では得難い経験が様々にあったこと、机上の構想が現実空間の構成をにない、実際のイベント会場で手応えを感じられたこと、大学内での成果物がどのように不特定多数の鑑賞者へ届くのか確認できたこと、実際に終えて見えてきた反省点も踏まえて次の目標ができたことなどが挙げられ、公募からはじまり、展示準備期間、イベント当日含めた期間において、大変に有意義な時間を過ごせたとのことが、学生の共通認識として語られた。

本企画に関し地域連携室にはきめ細やかに大変なご尽力いただき、また浜松産織機「坂本式」の貴重なミニチュア織機を快くお貸しくださった有限会社宮下機料さんなど多くの皆様に心より感謝申し上げます。

【会期】2022年10月1日～2日　【会場】浜松市ギャラリーモール　ソラモ、はままちプラス　【主催】遠州産地振興協議会　【協力】浜松市産業部産業振興課　【受託】誠和企画株式会社

C．産業織物と手織物の各比較分析によるデザイン融合提案の研究－遠州織物の織設計に基づく調査、推定復元より－（教員特別研究）

遠州の伝統産業織物の設計とデザインの資料整理・調査をし、知財としての地域資源散逸を防ぎ、地域文化継承と文化相互理解を図る。今回は特に、近年閉鎖された「絡み織」という特色ある技法を得意とした、浜松の織物工場の資料から、産業織物の推定復元、及び手織による織設計の復元を試みる。

図5-9　浜松工業技術支援センターにて調査

D．染織の現場を巡る、遠州産地バスツアー

遠州産地振興協議会、浜松市産業部産業振興課より遠州の魅力を伝える機会として、２年連続で学生のための遠州産地バスツアーを組んでいただいた。教員も引率し、染め、織りの工場数社を丁寧に見させていただき見聞を広めるとともに、今まで無かった浜松の染め、織り工場のインターンの窓口がひらくなど、少しずつ地域へのつながりができはじめている。

2021年実施内容：古橋織布有限会社、高田織布工場、日本形染株式会社
2022年実施内容：スズキ歴史館、ケイテキスタイル浜松工場、武藤染工小池工場見学

図5-10　武藤染工小池工場　捺染ワークショップ

図5-11
ケイテキスタイル
浜松工場

図5-12
ケイテキスタイル
浜松工場

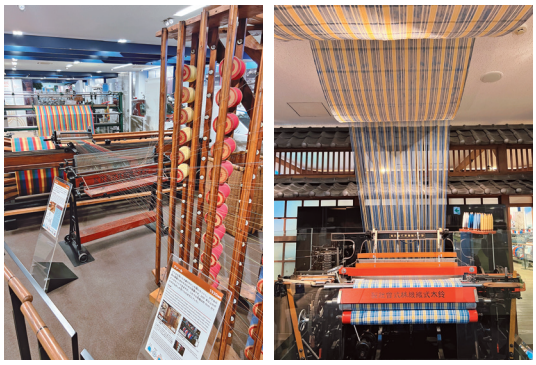

図5-13　スズキ歴史館

まとめ

本学と浜松地域のテキスタイル分野を通した関わりについて、行政や組合など、いくつか部署があり大変好意的であることから多くの方々のご理解とご協力を得られる場面も多く、地域連携及び協働の場を作ることが可能であることがわかった。

また異なる立場からの協働が、足す２、足す３ではなく、化学反応が起きることも十分予想されるなど手応えがある。成果物として残すことや、地域活性、学生への学びの場の提供など地域との関わりに豊かな可能性を感じるとともに、今後さらにアイデアを形にするなど、多様なアプローチができると確信している。

６．教育プログラムの検証－織の視点から

荒川　朋子

匠領域において外部講師を招いて本学学生に還元できる教員特別研究プログラムは何か、織関連を担当し実施させていただいた下記Ａ～Ｃ項目の活動報告からその教育的効果を検証する。

Ａ．講演：「遠州織物のレシピ」
Ｂ．講演：「予想外だった経糸・緯糸
　　―作品が教えてくれる次にすべきこと」
Ｃ．演習：二重織　ピックアップワークショップ

Ａ．講演：遠州織物のレシピ

遠州織物の若手ホープと言われる、古橋織布有限会社濱田美希氏に未来を担う若い学生へ向けて遠州織物の魅力を伝えていただきたく講演を依頼した。

遠州織物と日本の産業織物

多才な彼女であるが、とにかく織ることと作ることが好きであり、また大変な研究家でもあり、独特な経緯を経て遠州織物の担い手になっていた。講演では遠州の産業織物を取り巻く、経済、販路、デザインなどのお話、また難解な数学を駆使して織設計をすること、特殊加工の布の紹介、ご自身の仕事に向き合う姿勢、今後の展望など多岐にわたり遠州織物のレシピを紹介する場になった。

図6-1
濱田氏講義

また濱田氏は遠州織物の若い担い手からメンバーが構成される「ひよこの会」の代表も務めており、職人気質のある産業織物の一方で、若手ならではの視点からアプローチをかけるなど、産業全体の底上げ、後継者を育てていく活動も行っている。ＳＮＳからの積極的な発信からはじまり、何を、どう最終消費者へつないでいくのか、実験的ながら、継続的に経験の場を作っている。

講演の途中ではご自身の経験から、今の若い今後の進路が未定の学生へ向けて、その立場に寄り添った話をされたが、たいへんに興味深く、学生にとっては年齢的にも身近な頼もしい先輩の背中を見せてくれるようでもあったことだろう。

B．講演：予想外だった経糸・緯糸
ー作品が教えてくれる次にすべきこと

現役で活躍する教育者、またアーティストであり繊維研究者の鈴木純子氏により講演会とワークショップを開催した。午前の部、午後の部に分けてはいたが、1日でまとめて開催するため少しハードなプログラムかと予想がされたが、講義と実技という、学生にとって異なるベクトルから１つの分野を学び経験できる機会を提供できたことは、実は深い学びに繋がっていたことが後々わかることになった。

図6-2
鈴木氏講義

テキスタイル作品制作とアート、社会への発信力

鈴木氏は、武蔵野美術大学民族資料館で准教授として勤務しており、繊維素材を中心に研究と授業を行っている。地球規模での「材料の循環」にも造詣が深く話はつきないが、その彼女が繊維表現研究、アーティストとして独自の表現として選んだ代表的な技法が「シルクスクリーンプリント」と「織」を融合した「ほぐし絣」である。

学生時代に当時流行っていたPop Artの流れやアンディウォーフォールのシルクスクリーン、色彩に惹かれてとのことであったが、手法として用いているシルクスクリーンの技法そのものは、産業革命後に布に柄をプリントする大量生産の産業技術として世界中に広まった技法の１つであり、浜松の得意な産業の１つでもある。柄になるネガ・ポジの関係は、古来より着物にも使われている「型染め」に少し似ている。

鈴木氏のデザインソースはその時代の象徴や景色を切り抜いた写真であり、それをシルクスクリーンの版に落とし込み、一度手織機で織られた布にプリントし、それを完全に一度解し、更に織り直すことで再構成し作品化している。

布面を着色するシルクスクリーン技法を、あえて並置混色の織物に置き換え、ほぐすことから生まれる表情は、ある範囲を糸に委ねるコントロールの効かない領域でありそのテクスチャーは絶妙な面白さに溢れ、たいへん魅力的である。

とうもろこしのヒゲや皮の繊維を用いたクマと網の作品は環境への関心を、コーヒーフィルターの作品は農薬への関心を、それぞれへ人間の眼差しを導いてくれる作品群もたいへん力強い。

C．演習：二重織 ピックアップワークショップ

二重織におけるピックアップ技法を用いた柄を織りあげることから、織組織の構造を理解し経験する。

図6-3
二重織サンプル

図6-4
デモンストレーション

図6-5
織組織の解説

手から、素材と二重織構造への造詣を深める

・幾何学模様による構成でクリスマスツリーをピックアップで織る。
・当日までの事前準備では機がけまで済ませる。
〈織データ〉
糸：ウール2/5.5紡毛　２色、変わり糸
整経長：100cm、整経本数：80本、使用筬：40羽
筬密度：8/cm、織幅：10cm

織構造や組織点の見つけ方など丁寧な講義のあとデモンストレーションに移り、演習を行った。ピックアップ、ピックダウンで上層、下層を交互に織り進めるのだが、実際に手を動かす行為と出てくる絵柄の関係を理解しながら進められるまで、各々時間を要していたが、マニュアル通りに進めるにつれ、段々と手応えを感じながら進めている様子がうかがえた。

まとめ

外部講師を招くことは、普段の学内授業の経験を超えた新しい息吹を持ち込んでくれる。テキスタイルを通して浜松の地域から日本各地、海外へ、テキスタイル研究から世界各地へと活躍する講師２名の話は、夢物語ではない内容であった。そして学生にとっては特にコロナ禍で視点が狭くなりがちな時期でもあったためか、どうすれば、どうしたら、など頭の中を駆け巡り、普段の活動の行き先が外への繋がりを求めるベクトルへと育ち、具体的なきっかけになったことは想定外の影響で嬉しい結果となった。

織技法に関して、筆者自身と同じことを教えるにしても伝える視点や文言が微妙に異なるところが、学生の興味を誘い、集中力や理解力が高まることへ繋がる様子は興味深かった。

他者のフィールドで学ぶことも多い。これからも多様な人たちと関わる機会から見識を広げる場を作りその教育的効果に期待したい。

7．文化財を活用した授業展開

平野　英史

2021年度および2022年度の匠領域における授業「領域専門演習」では、デザイン学科３年生が作品制作と並行して展覧会の運営を行った。この授業の特色は、国登録の文化財である旧田代家住宅を展覧会場とすることにある。旧田代家住宅は、材木問屋として名を馳せた田代家が江戸時代末期に建築した住宅で、木材をふんだんに使用したオーソドックスな構造や、四季折々の景色が楽しめる繊細な庭園空間など、贅を凝らした住宅設計となっている。

しかしながら、現在は明治・大正・昭和期の世相を知る資料としての側面が強く、社会科見学のための施設となっている。そのため、日本の伝統建築の風流を肌で感じさせる風や光のとおる様子、人と人とが交流する場、という本来の姿を連想することが難しい状況にある。こうした状況を少しでも改善・変革するために、授業では作品を制作することと合わせて「文化財の活用」という目的を立てた。以下では、2022年度の授業の様子を概観する。

授業の流れは、次の４つの段階に分けて展開した。第一段階は「旧田代家の講義と調査」、第二段階は「展覧会の準備」、第三段階は「展覧会の運営と講評会」、第四段階は「大学での展示と反省会」として計画した。加えて、制作活動と展覧会運営とを有機的に結合させるために、ほぼ毎回（毎週）の授業の導入部分で展覧会運営の進捗を報告し合い、その直後に、染・織・木工・漆・金工の各工房に分かれて制作活動を進めた。以下では、授業における各段階の具体的な内容について、展覧会の以前（第一・第二段階）と以後（第三・第四段階）とに分けて解説する。

展覧会の以前

第一段階では、授業全体の導入として、展示会場である旧田代家住宅の歴史と文化財として登録された現在の状況を講義によって解説し、その後、実際に現地に赴き建築物の調査を行った。講義による解説では、住宅がつくられた経緯を天竜地区の産業の発達などと合わせてこの住宅の特徴を概観することで地域に根ざした文化財であることを印象付けた。さらに、具体的な建築手法について、使用された素材や工法などにまで踏み込んで説明を行った。現地での調査は、授業にかかわる教員と学生の全員で行った。調査時の旧田代家住宅では、歴史的な背景を説明する資料掲示や、当時を連想する生活雑器（食器や照明器具など）が数多く陳列されていた。また、柱や梁そして壁などに釘などを打ち込むことが禁止されているため、作品を展示するためには様々な工夫を要することが分かった。

第二段階では、講義による説明や調査による会場の把握に続いて、展覧会運営の構想が練られ、役割分担（会計、受付け、広報、キャプションなど）を行うなどして、準備に必要な情報や物品を集める計画を立てた。役割分担した内容を毎週、授業時間の冒頭部分で情報共有を行うことで不足した内容を補いながら、準備を進めることとなった。フライヤーやポスターの入稿に合わせて展覧会の詳細を決定することや、印刷物の送付・掲示の方法、キャプションや展示会場の経路など様々な問題が浮上した。学生を中心に一つ一つ問題を解決する中で、自己の作品制作および展示だけでなく、大学や地域での広報活動や、関係者とのコンセンサスの取り方など、人と人とをつなぐための労力が多いことを、学生が体験的に学べたことは大きな収穫であったと言える。

展覧会の以後

第三段階では、展覧会の運営を行った。旧田代家住宅における展示は、環境が作品の構成に大きな影響を与えることが分かっていたため、制作段階から現地を視察することが繰り返されていた。そのために、搬入時には大きな混乱もなく淡々と作品の設置が行われた。さらに、展覧会の開催期間には入口付近に受付を設置し、簡単なアンケートを通して来場者とのコミュニケーションを取ることや、一般公開で講評会を行うなど、単なる作品展示とは異なるイベント型の展覧会となった点についても、学生への良い影響であった。公開講評会では、一般的なホワイトキューブのギャラリーとは異なる開放的な雰囲気で、様々な意見の交換ができた。時間によって変化する日差しや流れる風の中で、たなびく染織の作品や光を反射する金工や漆の作品など、学内では実現することが難しい自然環境での展示となった。

第四段階では、大学のギャラリーにおける展示を行うことで、旧田代家での展覧会と比較することができた。学内の展示では、環境に影響を受けることがほとんどなく、照明装置によって作品の見え方の補正も可能であるなど、良い部分も多くの学生に感じさせることができた。どちらか一方が優れているということではなく、展覧会の方法や作品のコンセプトによって場所の選択基準が異なるという経験につながったと言える。この授業の最後の時間では、展覧会の会期中に行ったアンケートの結果と展覧会の準備および実施にかかわる感想を、学生と教員とで意見交換する機会を設けた。意見交換を通して、作品の制作や展示にかかわる内容を超えて、文化財の活用についてまで話が及び、来年度以降の授業展開にも役立てることができる内容となった。

まとめ

「領域専門演習」の授業で扱った文化財（旧田代家）を活用した展覧会について、全ての日程を終えて全体を俯瞰すると、第二段階で学生に展覧会の全体像を掴ませることが重要であることが分かった。学生が能動的に展覧会を運営するようになるまでに、特に以下の二つのポイントを挙げることができる。

一つ目のポイントは、制作と展示とが密接にかかわると

いう意識の共有である。作品をつくるということそれ自体に展示（または鑑賞）することが含まれるという感覚を授業の初期段階で共有する仕組みが必要だと言える。展覧会場の旧田代家住宅への調査はこの感覚を持つきっかけになった。作品制作の展開と並行して会場の確認に赴く学生も複数存在した。

二つ目のポイントは、前年度に上級生が開催した展覧会の様子を情報共有したことである。具体的な状況を写真やメールのやり取りを通して紹介したことで、この授業の実相を肌で感じさせた。現場の調査だけでは分かりづらい様々な問題（例えば、当日や前日の動き、搬出の方法、来場者の様子など）を事前に把握することで緊張感を持って準備することができた。

図7-1
事前の調査
（敷地の入口）

図7-2
作品の搬入
（住居の外側）

図7-3
作品の搬入
（住居の内部）

図7-4
一般公開の講評会

以上が、学生が能動的に展覧会運営を行うようになったポイントである。上記のポイント以外にも、ポスターが完成した時や旧田代家住宅の模型に学生各自の作品模型を実際に配置した時など、気持ちが変化した瞬間があったと言える。今後は、こうした経験を踏まえて、新たなポイントを授業計画に盛り込み、充実した教育効果をもたらす方法を試行錯誤していけたらと考える。

8．おわりに－デザイン教育における「匠」の展開

新妻　淳子

2019年度にデザイン学科に匠領域が増設され、2021年度に開催された静岡県文化プログラム「手の愉悦」展の準備は、匠領域の教育を試行錯誤しながら進めている最中に行われ、めざす育成人材像についても議論する機会となった。素材とそれに見合う加工技法の基本を体得した上で、企図に合わせ応用・展開できる身体性の獲得を目指すことを共通認識することができた。

静岡県の伝統産業の活性化を目的とした地域連携事業では、学生が地場産業の現状を知り、次世代のニーズに合った新たなモノ・コトへ展開することによって、地域社会へ貢献することができている。新規的なデザインが若い世代を触発し、地場産業への接触機会を増やせるよう、この取り組みが継続することは重要である。

本学と浜松地域のテキスタイル分野と連携した取り組みが、遠州織物・遠州産地の個性や美しさを多角的に伝える「綿の産地フェアーはままつ染め織りマーケットー」という形で開催された。マーケット会場の計画案は学内コンペで選ばれ、空間設計は建築・環境領域学生、空間装飾は匠領域学生が担当し、学内外の関係者が共同で浜松の染め織りの世界を創り上げる意義深いイベントとなった。遠州の伝統産業織物の設計とデザインの資料整理・調査も開始し、知財としての地域資源散逸を防ぎ、地域文化継承と文化相互理解を図る、地域との共同研究も進めている。

文化財の活用の側面からは、旧田代家住宅を会場とした学生作品展はユニークベニュー活動として期待されているが、何よりも日本の歴史・文化・技術を身体で感じ学ぶ教育にご理解いただけることは、文化財を護り伝える活動そのものであり、教育研究の成果発表の機会としても、今後も継続できるよう、地域との協働を推進していきたい。

文化政策学部・デザイン学部の一年生から地域の課題に取り組む地域連携演習は、本学の特徴的な授業（プロジェクト）であり、地域の研究を、教員が深める研究として参画し、学生がそれぞれの立ち位置で地域とつながり始めている。

匠領域教員の教育・研究活動は、それぞれの分野を起点として始まっているものが多いが、つなぐ研究を意識して、様々なつながりの輪が重なり始めている。地域の拠点として、教育・研究活動を継続し、輪を広げていきたい。

本報告の教育・研究活動は、2017年度から教員特別研究費の助成により進めた研究成果の一部です。本文中でご紹介させていただいた皆様、本学教職員・学生の皆様のご理解・ご協力によって実施できましたこと、心より感謝申し上げます。